ソウル市・京畿道の親環境無償給食(3)　（『むくげ通信』303 号 2020.11.29 より）　近藤富男

■ここでこの白書の目次を示しておく。目次のみでもソウル市がどれだけ熾烈で繊細に親環境無償給食の絵を描き、その実現のために奮闘してきたか感じられる。

ソウル市親環境無償給食
プロローグ　親環境無償給食の6年，挑戦と省察
第Ⅰ部　親環境無償給食の足跡と成果
1. 学校給食のあらたな門を開く
学校給食の危機
保護者と市民がのりだす
親環境無償給食が政策化される
2. ソウル市、親環境無償給食をはじめる
政治的葛藤
住民投票、社会的合意のはじまり
ソウル市親環境無償給食の意味（1）
ソウル市親環境無償給食の意味（2）
3. ソウル市親環境無償給食の成果
事業成果
政策評価
学術成果
第Ⅱ部　親環境無償給食の政策評価分析
1. 親環境無償給食の社会経済的波及効果
有料給食から「無償」給食へ
無償給食はなぜ普遍的福祉論争になったか？
予算の浪費なのか、社会的投資なのか
所得主導・社会投資政策としての親環境無償給食
ソウル市親環境無償給食の生産誘発効果と付加価値創出効果
ソウル市親環境無償給食の雇用創出効果
のこされた課題
2. 親環境無償給食の公的調達システム評価
食材料調達の公共性を確保する
最高水準の安全性を確保する
適時に安定的に供給する
都農共生の道を開く
親環境給食の成果を公共給食へと拡大する
親環境給食公的調達は普遍的趨勢である
3. 親環境無償給食の教育的効果
食べ物教育、もう一つの政策目標となる
幸福な食卓、農場から学校まで
多彩な体験で親環境を学ぶ
伝統の味覚を取り戻す
親環境給食教育的効果の一般化の可能性
親環境食べ物教育政策のためのソウル市の事業
持続可能な親環境食べ物教育のために
4. 親環境無償給食品質評価
学校給食の変化、品質の問題
食材料調達の品質を高める
親環境給食の品質、保護者がまもる
5. 親環境無償給食の児童・青少年健康増進効果
はじめに
無償給食で食べ物の安定性が高まる
無償給食でこどもたちが健康になる
団体給食効果：食生活習慣を改善する
親環境無償給食（1）
　－学校基盤公共健康増進プログラムとして機能する
親環境無償給食（2）
　－健康不平等緩和政策として機能する
親環境無償給食（3）
　－温室効果ガス低減献立として慢性疾患を予防する
のこされた課題
6. 親環境無償給食の環境寄与度評価
農業の多元的価値を保全する
親環境農業のこころづよい基盤になる
温室効果ガス排出を減らす
自分の食べる一食の親環境給食、どんな環境的効果がある？
Epilogue_ソウル市親環境給食、未来を夢見る

■さて白書では、この親環境無償給食政策が各方面におおきな影響をおよぼしてきたことが述べられているが、やはりもっとも注目すべきは、こどもたちにどのような影響があり、こどもたちがこれをどのようにうけとめたかであろう。そして保護者はこれをどう考えているのであろうか。この白書を読んで聞いてみたいことが具体化してきていた。それを探るために今年 2020 年 3 月末に予定されていた「親環境無償給食をまなぶツアー」に参加予約をしていたのであるが、ご存じのとおり韓国とのあいだの行き来ができなくなり、いまだ実現していない。やむをえず、白書に書かれていることを紹介することにする。

■すこし白書をさきまわりして、第Ⅱ部第 3 章をみてみよう。第Ⅱ部は「親環境無償給食の政策効果分析」とされ、その第 3 章では**「親環境無償給食の教育的効果」**がつぎの 7 点にまとめられている。(以下、下線は筆者：近藤)

この6年間の事業推進過程において「食べ物生産と食べ物に含まれている親環境的価値に焦点を合わせる」食べ物教育の革新がなされた。自家菜園体験と伝統食文化体験を中心としておくの食生活体験を結合する教育プログラムが開発され、保護者がソウル市講師養成課程を経てこのプログラムをすすめている。

1. 食べ物教育、もう一つの政策目標となる
2. 幸せな食卓、農場から学校まで
3. 多彩な体験で親環境を学ぶ
4. 伝統の味覚をよみがえらせる
5. 親環境給食教育効果の一般化の可能性
6. 親環境食べ物教育政策のためのソウル市の事業
7. 持続可能な親環境食べ物教育のために

■では、順番にみていこう。

「1. 食べ物教育、もう一つの政策目標となる」のまえがきで学校給食はいまや、一食の食事を提供するということにとどまらず、ただしい食習慣を形成するための有効な手段でありうるとつぎのようにいう。

いま、食べ物は単純に空腹をみたす量の問題ではなく、なにをどうやってたべるかという質の問題にうつってきている。産業化を経るなかで絶対的な食べ物の貧困は相当水準解決されたが、ファストフードの氾濫、産業化された食べ物の大量生産、有害な食品添加物などによって、食べ物の安全性に対する憂慮が広まっている。時間のリズムが速くなって食事を抜いたり、不規則な食事がくりかえされたりして肥満と栄養のアンバランスを憂慮する声もおおきい。外国の農産物の輸入増加で国内の食糧自給率がおおきくさがり、農業と食べ物の持続可能性が気にかかる。特に、こどもと青少年時期は食べ物をめぐる態度と価値が形成される時期であるという点で、ただしい食習慣形成のための食べ物教育に対する責任が強調されている。

■ここでのべられていることは、現在の日本にもほぼあてはまるとおもわれるが、はたして日本ではこの件についてどのように認識され、どのような対策がなされているであろうか。日本でも学校給食の現場では栄養職員の方々を中心にして、個々に努力されているとおもうが、自治体段階で、政府段階で議論されているであろうか。韓国は政府として「食生活教育支援法」を制定し、ソウル市は市として「食べ物教育」を制度化した。

＜食べ物教育を制度化する＞

こどもと青少年の食べ物教育は一次的には学校の責務である。しかし、学校だけの努力で食生活教育が早期の成果をおさめるのはむずかしいのが現実である。ただしい食習慣の形成はおさない時期にできあがるために小学校低学年期に食べ物教育がなされねばならないが、公式の教育課程で食生活教育は高学年に編成されていて、それさえも教育時数が充分ではない。さらに教育を担当する専門人力の不足と実習授業のための施設が不備で効果的な授業運営がむずかしいのが現実である。

このように学校内の食べ物教育は活発ではないが、学校外での食生活教育に対する社会的関心は次第に高まっている。政府次元においては去る2009年「食生活教育支援法」を制定して、学校での食生活教育に対する社会的支援をうながし、地域社会の多様な支援を教育に効果的に活用して、市民たちに食生活教育をして、食習慣を改善することができるように自治体単位の努力をうながした。この過程でソウル市は2011年親環境無償給食の実施を契機に学校給食と連携して学校食べ物教育に対する支援方法を模索した。

学校給食を活用したこどもたちの食生活教育に期待がおおきいのは学校給食がもつ教育的意義がこのうえなくおおきいからである。学校給食自体は教育制度ではないが、学校給食が食生活教育にもつ意義は、公式な教育制度に劣らない。

■学校給食は昔とちがってただ 1 食の栄養をとるための食べ物にとどまらない。それをつうじて農産物についても知識を得、生産者とつながり、環境をまもることの大切さをまなぶ。つまり、学校給食自体があらたな学びとなるという。

＜学校給食が新しい教育になる＞

学校給食で提供する食べ物は学生の健康におおきな影響を与え、ひいては新しい教育の機会を提供する。おおくの研究は栄養素をバランスよく摂取して、欠かすことなく規則的にたべるほど身体的に健康で認知的学習能力にもやくだつという事実をあきらかにしている。学校給食はほぼ毎日規則的にくりかえされ、先生と友だちと一緒に経験しながらたがいに影響を与えたり、うけたりするために食知識の習得や食習慣形成に与える効果が非常におおきい。

学校給食で提供する1食の食事はただ栄養を摂取するための食べ物にとどまるものではない。特定の食べ物は食材がどこからきて、どのようにつくられたかの生産、流通、加工に関する内容をあわせもっている。したがって、学校給食で提供される食べ物・食事をとおして知識を学び、のぞましい食べ物とはどういうものかを理解する態度と規範を形成することができる。たとえば、給食で提供される親環境の食べ物を通して親環境農産物についての知識を得て、生産者の苦労に感謝し、環境保全の大切さを認識し、食べ物をのこさない親環境的行動を習慣化することができる。さらには伝統的な食べ物と食膳文化をとおして民族がつちかってきた味覚を感じ、民族の文化的全体性を形成もする。

学校給食は父母と家庭生活にも影響を与える。父母の立場でこどもの学習活動におとらず学校での食事についておおくの関心をもつ。父母たちは学校給食モニタリングに直接参加したり、家庭につたえられるメニューをしらべたり、こどもと給食や食べ物についてよく会話する。このおなじ活動をとおして保護者に食べ物に関する関心がうまれ、新しい知識を得ることができる。保護者が親環境農産物や地域農産物の重要性を認識し、食べ物についての新しい意識は家族の献立にも影響を与える。すなわち、学校給食をとおして学校と家庭の協力が促進され、さらに家族の食事の変化を図れるのである。

よく似た脈略で学校給食は地域社会と学校をつなぐ。学校給食の材料として地域社会の食べ物をつかい、食生活教育に地域社会の支援を活用する連携と協力を通じて、学生たちは地域社会の食べ物に関心をもつようになり、これを契機に地域社会に対する学生の関心と関与が促進されることもある。

＜食べ物教育が学校給食のまたべつの目標となる＞

学校給食を通じた食生活教育の目標は理想的なものであ

るが、教育現場で次第に現実化されている。政府が最近樹立した教育計画案がこれをよくみせてくれる。2015年樹立した政府の第2次食生活教育計画において、食べ物に関して正しい知識とのぞましい食習慣を体得することができるよう学校給食の時間を「生きた教材」として活用することを提案し、学校給食による食生活実践指導を主要実践課題と設定している（農林畜産食品部,2015；9)。また、ソウル市教育庁は給食現場を生活教育の場として活用し、より教育的に運営できるよう従来の給食所や食堂の名称を「食生活教育館」とか「食生活館」などに変更して、映像装備など教育環境を整えて本格的な食生活教育空間として活用することを勧告している（ソウル市教育庁,2015；26)。

学校食生活教育の今後の方向を学校給食を通じた教育として設定したのは、この間学校給食を通じた食生活教育がおさめた成果に基づくものでもある。いま、学校給食は単純に一食の食事を提供する段階から、給食を通じて健全な食習慣を形成し、望ましい価値を確認する段階へと次第に向かっている。

2011年からソウル市次元において全面実施された親環境無償給食は親環境の価値と差別のない平等性の価値を強調した。親環境無償給食への転換とともに、これを実現しようとさまざまな関連政策がつづいたが、学校給食と連携した教育関連事業も政策のひとつの領域として定着している。今、食べ物教育は学校給食のもう一つの政策目標となった。

■つづいて、**「2. 幸せな食卓、農場から学校まで」**と題して、これからの学校給食は農家と学校、農村と都市をつなぐ重要な役割を果たすものとなることをのべる。そして、学校給食と関連してこのようなひろい意味での食生活教育をおこなう学校を、政府･自治体が支援する態勢がととのえられている。こどもたちの教育だけではなく、関係者、保護者の教育も視野にいれた実践となっているのである。

去る5年の間、ソウル市で学校給食と関連して推進した食生活教育事業は大きく3つである。

1. 親環境食生活教育を実施する学校に対して補助金を支援する学校支援事業として、年ごとに親環境食生活教育プログラムを申請した学校の中から、対象学校を選定して補助金を支給する事業である。
2. 親環境学校給食関係者の教育である。親環境給食関係者を対象として親環境の食べ物に対する専門職務教育を支援して対象物にあった教育を実施し、教育に必要な教育道具を制作する事業も施行している。
3. 親環境食べ物教育のための保護者講師養成事業である。親環境給食の拡大で学校現場の増加する需要に備えて保護者を食べ物教育専門講師として養成し、教育に活用するための事業である。

＜食生活教育の学校を支援する＞

親環境食生活教育学校支援事業は学校給食を活用した食生活教育事業中最も代表的な事業である。親環境食生活についての正しい理解と認識が拡散定着するように補助金を学校に支援して、こどもたちが親環境食生活の真正な価値を追求するただしい食習慣をそなえたこどもになるように支援した。事業で規定した親環境食生活教育の目標と方法には次の3つの特徴がある。

1. 教育内容において食品の消費領域だけではなく、生産から消費に至る過程をすべて含んでいる。従来の大部分の食生活教育が主に消費中心であったとするならば、農産物がどのように生産されて食卓にとどけられるのかの全過程へと食生活教育の範囲が拡張された。
2. 健康とともに環境と配慮、わかちあいの価値を重視する。健康中心の栄養教育から学校給食生態的価値へと内容を広げ、食べ物を通じて人との協力と関係を促進することを目標とした。
3. 教育の持続性維持のために学校教育課程と連携を試みた。従来の一回性の教育プログラムからあらわれた限界を克服して、持続的な教育効果を得るために学校の教育課程に組み込むことを試みた。

学校支援事業の初期の段階において主に調理実習や現場訪問のような一回性の体験学習が主になされたが、2015年以降には学校で自家菜園体験や伝統醤模範学校のように相対的に学習期間が長く、学校の教育課程を活用する教育で内容と方法において質的に拡大され、体系化される様相である。このような変化は初期事業の施行以後の教員と保護者の要求を反映した結果であるが、ソウル市が食べ物教育について新しい社会的要求を盛り込む過程でもある。親環境給食で都農共生や地域の食べ物の社会的価値を強調することによって食べ物教育においてもこれにふさわしい内容が追加されるのである。

■それでは、学校給食を通じておこなう教育課題はどのようなものなのか。具体的にどのようなプログラムに対して支援がおこなわれたのかをみてみよう。「健康」「環境」「配慮」の領域にわたってはばひろくおこなわれていることがわかる。親環境農法から伝統の食べ物、朝食をとること、欠食と偏食を抑制すること、食品表記・食品添加物……と、食のほとんどすべての領域にわたってとりくまれている。

＜健康、環境、配慮を強調する＞

それでは、支援教育プログラムにおいて実際にどんな内容で構成されているのか。次ページの＜表＞は2013年から2015年までソウル市が支援した食生活教育事例の内容を健康、環境、配慮の領域別に分類した資料である。健康領域には正しい食習慣、栄養教育、朝食をとること、正しい食

べ物を選択すること、食品表記をしらべること、食品安全教育、伝統の食べ物の理解、食中毒予防教育の主題が、環境領域には親環境学校給食の理解、地域農産物、親環境農産物、食べ物ゴミを減らす、配慮領域には、食事の礼節を調べること、食膳教育の主題がそれぞれ含まれている。

教育内容を食べ物生産及び食資材、食べる行動とメニュー、食べ物情報の食べ物要素別主題でもう一度分類してみよう。食べ物生産及び食資材に関連した主題は親環境農産物、親環境農法、国産米、地域農産物、伝統の食べ物、発酵食品、フードマイレージで大部分親環境性、伝統性、地域性を強調する主題である。食べ物のメニューには糖、ナトリウム、トランス脂肪が少ない食品、野菜、果実で肥満予防と健康食メニューの主題である。食べる行動には朝食とること、偏食をしないこと、家族で食べること。食事の礼節の内容として、欠食と偏食の不規則な食事を抑制して食事の礼節と家族の重要性を強調しており、食べ物の安全性領域では食品表記、食品添加物、食品アレルギー、食中毒のような食品情報と知識を通じた危険認識の内容を含んでいる。このような分類においてもわかるように食べ物消費と食べ物の安全性に関する主題におとらず、農業生産と親環境食材料に関連した主題を多く取り扱っている。

ソウル市支援親環境食生活教育の領域別内容：2013－2015

領域	食生活教育主題	細部内容
健康	正しい食習慣、栄養教育	満遍なくたべること、肥満予防、野菜・果実を食べること
	朝食をとること	朝食の重要性、朝食を食べる習慣化
		放送教育　視聴しながら　親環境朝食を食べること
	正しい食べ物選択すること	糖、ナトリウム、トランス脂肪摂取を減らすこと
		健康な間食を調べること
	食品表記を調べること	食品添加物を正しく知る
	食品安全教育	食中毒予防方法を調べること
		食品アレルギーについて調べること
	伝統的な食べ物の理解	伝統的な食べ物の特徴と優秀性を調べること
		発酵食品、季節の食べ物の理解
	食中毒予防教育	食中毒について調べて、正しく手洗い体験
		該当区庁保健所支援可能
環境	親環境学校給食の理解	衛生的で安全な学校給食について理解
	地域農産物	フードマイレージ教育、地域の産物のよい点
	親環境農産物	国産米がいいです、親環境農法を調べること
	食べ物のゴミ減らすこと	
配慮	食事の礼節を調べること	給食食事の礼節、箸の使い方教育
	食膳教育	家族で食事

（資料：ソウル市親環境給食担当官（2016））

■学校の親環境無償給食に並行して「食べ物教育」が積極的におこなわれている。自家菜園自家農園体験、伝統食文化体験、伝統醤をつくる体験、正しい食生活体験など、体験学習中心に明確な目的をもって実践されている。

＜体験を重要視する＞

体験学習は食べ物の生産と栽培、料理、摂取過程に実際に参加して体得するために食べ物教育に非常に適合した教育方法として認定されている。体験学習は五感を活用した多くの種類の能動的学習活動を通して多様な教育効果を得ることができる利点がある（キムヨンジンほか．2007.）。ソウル市が支援した学校親環境食べ物教育も大部分体験学習中心である。

体験学習の形態を主題と学習活動の側面に区分してみると、主題別には自家菜園自家農園体験、伝統食文化体験、正しい食生活体験にわけることができる。自家菜園と自家農園体験は自家菜園や自家農園の造成、種まきと田植え、管理、収穫と秋の取り入れなど、作物生育の全過程を体験して、伝統食文化体験は伝統の食べ物と関連した場所や施設訪問、伝統の食べ物料理実習、味覚体験が中心となって、正しい食生活体験は料理と味覚中心である。

正しい食生活体験が料理と味見活動が中心とするならば、自家菜園と自家農園学習は作物を育てるすべての過程によって多様な活動を含んでいる。ところで、実際、教育にはいろいろな主題を共に体験する場合が多い。自家菜園で伝統作物を栽培したり、自家菜園体験以後に正しい食生活体験をする方式でいろいろな活動を順次体験したりする複合的な体験である。いろいろな体験と活動を有機的に結合して教育効果を高めようという教育プログラムが最近多く試みられている。

ソウル市支援親環境食生活教育体験学習の内容：2013－2015

区分	体験教育主題
自家菜園自家農園体験	自家菜園造成、種まきおよび苗の植え付け、自家菜園管理、自家菜園の収穫、自家菜園体験関連詩想
	田植えの準備、事前教育、田植え体験、稲の生育環境観察、秋の刈り取り
伝統食　食文化体験	鉄器料理体験、トッポッキ研究所、農業博物館、餅博物館、淳昌醤類体験館、「やってくる甕置き場」、

	餅の日、キムジャン体験および分かち合い、伝統食作り、伝統料理大会詩想
正しい食生活体験	栄養体験館体験、丈夫な食べ物探検隊、味覚体験、給食室体験、食生活ミュージカル観覧、正しい食生活大会、健康なおやつつくり、調理実習、料理大会詩想

（資料：ソウル市親環境給食担当官）

3. 多様な体験で親環境を学ぶ

ソウル市の親環境流通センターで実施する産地体験活動事例を見ると、食べ物体験についての関心は年ごとに増加しており、満足度が高い。特に2015年以後に回数と参加人員が急激に増加していて、参加対象も学生から保護者、栄養教員へと拡大している。体験活動についての参加者満足度は非常に高い。去る2016年建国大のキムユンドゥ教授チームによって遂行されたソウル市学術用役課題「親環境無償給食政策の効果分析研究」のアンケート調査によると、農村体験活動に参加した学生の67.6%が農業と農村を学んで理解するのに役だったと答え、また、参加した保護者の62.7%がこどもの農業と農村に対する理解と関心を拡大する助けになった、栄養教員の76.3%が体験・経験が学生の食生活教育および指導に役に立ったと答え、非常に肯定的に評価している。

ソウル市親環境流通センター実施産地体験活動

年度	2012	2013	2014	2015	2016
回数	12	29	13	142	148
人員	1,443	2,144	583	3,697	3,544

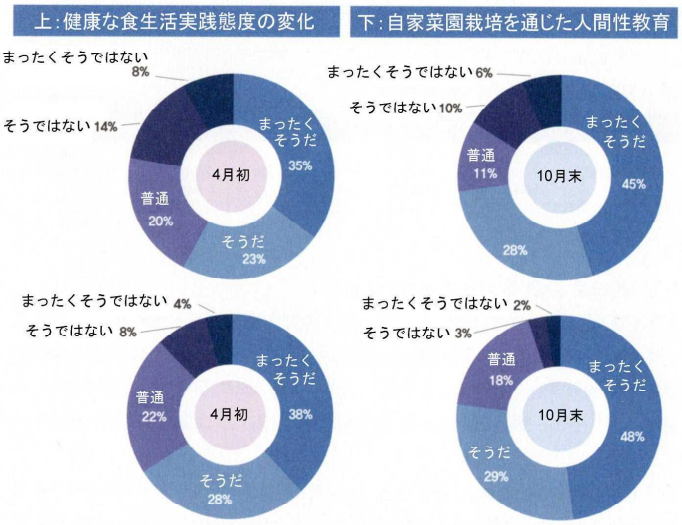
＜自家菜園体験で農を学び、食習慣を変える＞

まず、自家菜園体験学習のいろいろな形態に注目して、自家菜園体験が学生と教育共同体にもたらした教育的効果について調べてみよう。自家菜園と自家農園体験は自家菜園と自家農園の造成、種まき、収穫まで全過程を多様な活動で体験し、長い学習期間をもとめられ、教育効果が大きいものと期待される。下に説明する内容はソウル市支援で自家菜園体験学習を実施した担当教員が作成した結果報告書に収録された内容である。

自家菜園体験は栽培作物と成長過程を直接観察するために一体的に認知能力と探求力向上の学習効果がある。体験学習担当教員は、「植物の成長を観察して食品と栄養についての知識が増加した」、「農作物成長過程観察経験で生命に対する親和力が大きくなった」、「生命の大切さを認識する生態体験学習の場である」、「食糧資源の大切さを呼び覚ます契機となり、穀物の大切さと農民に感謝する心を体験した」と体験学習の認知的効果を記している。体験を単純に食べ物を探求する効果的な教育道具の次元を超えて、生物と資源に対する親和性を新たに獲得し、生態的感受性が大きく増進される結果をもたらした(ソウル市親環境給食課、2014～2016)

その上、自家菜園で農産物と食資材を直接耕作する経験は学校給食に対する態度と食習慣の変化をうむきっかけとなった。自家菜園農作物を直接収穫する経験を通じて野菜について考えるようになり、以前は野菜をよく食べていなかった学生が野菜を好んで求める食習慣の変化が観察されている。自家菜園体験学習を実施した多くの学校で、好んで野菜を選ぶ態度が増加するなど学生たちの食習慣が変化するのを確認することができた。

親環境食生活教育評価：ソビンゴ小学校の事例



※ 親環境食生活教育アンケート結果健康な食生活に対して肯定的なこたえが4月初めには58%であって10月末には73%と親環境食生活教育を通じて健康な食生活を実践していることが明らかとなった。また、自家菜園栽培が人間性教育アンケートの結果、4月初め66%から10月末77%と、4月対比11%向上して教育の効果があったことがわかる（ソウルソビンゴ小学校2016）。

住居地と学校が密集した都心地域に位置したソウルソビンゴ小学校で1年の間、学校の自家菜園を運営した結果報告書は「学校の自家菜園で農産物を植えて育てる体験活動と親環境農産物を直接収穫してみる経験から、野菜を喜んで食べ親環境献立を好む習慣が定着し、多様な体験中心食生活教育活動で農産物が生まれるまでの過程を知り、農民の汗の大切さに対して感謝の心を持ち、学校給食に参与するようになって給食残飯量が減り、給食満足度が高まった」と変化の様相を評価している。

●農村の農民たちがこんな仕事をしているのを知ることができた。穀物がどのように成長しているかもわかった。多様な体験でどんな体験をしても退屈せず楽しかった。また、僕が収穫した野菜を手にした時はとてもうれしかった。

●学生が責任感をもって作物を育てながら生命の大切さ、食べ物に対する関心を持つことができて教育的意味があった。生産過程で農民の苦労と犠牲、収穫の喜びを知って、教科と違い生き生きとした現場を経験することができてよかった。　（以下青字は担当者、参加者の感想）

中学校で実施した自家菜園体験教育プログラムの評価調査においても似たような結果を見せている。ソウルカンドン中学校は自家菜園体験を親環境改善教育と並行して実施したのだが、事前調査と事後調査を比較した結果、親環境食生活教育の重要性に対する認識と野菜摂取が増加して、ファストフードと炭酸飲料の摂取は大幅に減少していた。

●「自家菜園体験の結果、親環境食生活の重要性に対して8

4.4%の学生が重要性を認識しており、よくわからないという学生が44.5%から15.6%へと減少した。親環境野菜を1週間に2回以上摂取する学生が87.8%へと増加して2回以下という学生が28.9%から12.2%へと減少した。事前調査でファストフードやインスタント、炭酸飲料を50%に近い学生が1週間に2回以上摂取していたが、それぞれ20.2%、25.5%、25.5%へと減少した。学生は自身の健康のために48.9%の学生が親環境野菜中心へとかえなければならないと答え、過去肉類摂取を増やさねばならないと考えていた32.2%の学生が13.3%へと減少した。」　（ソウル市教育庁，2017；158）

＜自家菜園体験が人間性を変える＞

友達と自家菜園で栽培をともにしながら友達との協力的関係が増進した。次の担任教員の所感に感謝と配慮、人と自然を思う学生の変化が印象的に記述されている。

●「自家菜園での栽培活動は親環境野菜を味わって育てる力と旬の食べ物の体験および収穫のうれしさを知って感謝と配慮の心と親環境的食生活態度を形成するようになった。自家菜園で育つ14余種類の葉野菜と白菜、大根が青く育つ姿を見ながら、偏食習慣も改善され、作物を栽培して食べ物を作るすべての方たちに対して感謝する心をもつようになった。生態学校の実現のために今の生態空間を基盤として生態的な感受性を回復させ、今後もその経験をもとに自然とともに幸せな生を営むであろうと期待させる。」

（担任教員所感文）

友達と自家菜園栽培を一緒にしながら、友達との協力的関係も増進もした。自家菜園栽培に参加した学生を観察した担任教員の所感を見ると、自家菜園体験で友達との争いとぞんざいな言葉遣いが減って、誰もが互いに調和する姿を見せてくれたと記述している。

●「以前ならば植物を見てもただすごしていたけど、最近はともに仲良く自家菜園の植物を見に行って、水もやり、また植物によく育ってと応援の一言もかけてくる。そんな姿を見ると、自然の力は本当に大きいようだ。悪口を言い合う姿も非常に少なくなり、友達とどのように調和しなければならないかわからなかったこどもたちも自然に交わって自家菜園をぶらつく。」　（担任教員観察日誌）

＜自家菜園体験が新しい教育になる＞

年を経るごとに自家菜園体験を活用した新しい教育プログラムが開発されている。特に食生活教育のいろいろな主題と内容を有機的に結合したソウルソンサン小学校の事例が注目される。これを見れば、1. 野菜の理解のための栄養教育、2. 自家菜園仕事を通じた栽培、3. 献立を直接作って料理してみて、そのレシピを学校給食に活用、4. 食べ物の残飯を少なくする環境運動として構成し、自家菜園仕事を通して農を理解し、ここで栽培された食材料で料理をし、その結果を学校給食に反映するという統合型教育プログラムを作って運営している。結果的に食知識、農知識、食行動をひとつに結合して生態価値、健康価値、社会価値をひとつのプログラムにむすびつけて食生活教育効果を極大化しているのである。

自家菜園体験の参加様相も時期別に変化している。支援事業初期には体験学習はサークル次元や一部の学生を中心として進められたが、次第に全体の学生と教職員が参加する形態が増えている。学校の教科科目と連携したり自由学期制を活用する方式を導入するためである。保護者や家族単位の参加も増えている。学校の中に自家菜園を造成して栽培活動が相当期間持続されるために、自家菜園体験を直接担当する教師と学生以外にも多くの教師と保護者の関心と好感を呼び起こすことができる。学校の自家菜園体験に対する広報と行事は保護者の参加に重要な役割をはたす。学校での自家菜園活用教育活動について教育通信とホームページをとおして根気よく家庭に広報をして多くの行事を開催する方式を活用し、食生活教育に保護者の参加を積極的に誘導する。家族とともに炊飯、五行詩作文など食生活関連行事として家庭で保護者と、食べ物と食習慣について話をする機会をつくっている。自家菜園体験は教師と保護者にも新しい経験として学校と食べ物に対する新しい認識と悟りをあたえているのである。

●いつも受けとるだけだったのが、本人自ら自家菜園に水をやり愛と関心をもって野菜を育てる姿を見ると胸がいっぱいになります。普段食べる野菜について関心がない場合が多いが、直接育ててどのようにすれば育つのかわかって、野菜に対する拒否感が少なくなっている。　（保護者）

●昔、我々が学校に通っていた時は試験の恐怖と学校に対する不信が多かった。だが、ヨンドゥンポ小学校の生態の森ベンチに座って鳥の声を聞きながら休み、庭に座るようにプールのパラソルに座って生態自家菜園を眺め、実っていく稲と案山子を眺めていると、学校がこのように平和的で幸せでありえるんだなあと考えて、しょっちゅう学校に来たくなる。学校の秋の収穫に一緒に参加して学校教育をさらに信頼するようになった。今日、家でかぼちゃのジョンを焼いて家族と一緒に美味しくいただきます。（保護者）

●出勤すると校門から自然が溢れている。せちがらい都市生活の中で休養林に来た気分だ。学生たちに生態教育をしながら、自分もやはり農民の夢を育む。健康な食べ物というものに覚醒させる契機となって非常に良い。　（教員）

■ 3 章のすべてを紹介することはできなかったが、ここまででも、ソウル市の親環境無償給食がなにをみすえておこなわれているのかがわかるというものである。政治的葛藤をへて実現されたものであり、いまもなお攻撃がつづいていることから、より広範囲の検討がなされている面もあるが、十分な成果がみえてきているとおもう。

次回もさらにこどもたちがどのような体験をしてどのようにかわってきたかをみていきたい。そしてさらに経済効果、雇用創出効果、気候変動低減効果などにまでおよんでいく。　（つづく）